キャリア教育で学校を変える。教師が変える。



50周年を迎える。その間、就職難、受 は長い。創設は1962年だから今年 はなく、「東京都高等学校 験激化、高大・高専連携、入試の多様 指導協議会」(全高進)の下部組織で 的な組織である「全国高等学校 近くの高校が加盟し、毎週金曜日に 会」という団体がある。通称、多摩高 門学校の見学会などを行っている。 情報交換、調査研究、企業や大学・専 進。東京都多摩地区における120 息団体だ。にもかかわらず、その歴史 多摩地区高等学校 進路指導協議 (都高進)とも一線を画す任 進路指

多摩高進

(多摩地区高等学校 進路指導協議会)

共職業安定所における「高等学校職業安定担当者会議」のメ かんする情報の収集、情報交換、調査研究などを行う。 ンバーで組織される地区協議会を基本単位とし、進路指導に 120校が加盟。立川、八王子、三鷹、青梅、府中、町田の各公 たまこうしん●1962年設立。東京都多摩地区の公・私立約

文/堀水潤一 撮影/渡邉 力(6、6Pを除く)

してきた。 化など、時代がもたらす課題に対応

地域における進路指導の中核的存在 歴史を概観する。 になりえたのか。歴代の事務局長なら に現執行部らの証言をもとに、その 一任意団体が、なぜこれほどの期間

だ。手元の資料は設立の経緯をこう伝え として発足したのは62年6月1日のこと 内高等学校進路指導協議会」(立高進) 摩高進が「立川公共職業安定所管

生徒への就職指導はどう対応すべきかな した。就職難の時代をどう乗り切るか 強い要望によって、まず立高進が発足しま うな環境のなか、立川職安管内の高校の 用をお願いして歩いた時代でした。このよ は寸暇を惜しんで企業を訪ね、生徒の採 「当時は大変な求人難で、各校の担当者

ど、喫緊のテーマが活動の中心でした」



四ほど行われる「高等学校職業安定担当 者会議」(高担会議)を、「せつかく各校の 者会議」(高担会議)を、「せつかく各校の 就職担当が集まるのであれば、職安職員 の話を聞くだけではなく、教員の自主的 な研修の場にしよう」ということで生まれた組織であった。創設者にして、初代(62 ~67年度)および第4代(71~83年度)事 務局長を務めた玉橋由之(故人)は、当 時、如実にあったという「三多摩格差」の 解消に向けて骨を折った。

こ多摩とは、区部、島嶼部を除いた東京都の高大な地域のこと。人口急増に件う新設校が多く、また当時は大企業が件が新設校が多く、また当時は大企業がのに集中していたこともあり、就職に際のでは、区部、島嶼部を除いた東京

ない」(いずれも途上の駅名)と話す生徒から都心の新宿駅、高尾駅からも1時間度。西方の青梅駅、高尾駅からも1時間度がある。それでも、「吉祥寺より東は別世界」「中野の学校? そんな奥地には行けるい」(いずれも途上の駅名)と話す生徒

以上の隔たりがあるようだ。もいるなど、多摩と区部との間には距離

第12代(05~06年度)事務局長を務め、第12代(05~06年度)事務局長を務め、明治期に多摩県として独立させ地域は、明治期に多摩県として独立させる話もあったほど歴史的、文化的にまとまりがあるところ」。こうした地域性も、多摩高進がまとまる理由の一つであろう。さて、一職安管内で立ち上がった団体が、さて、一職安管内で立ち上がった団体が、さて、一職安管内で立ち上がった団体が、さて、一職安管内で立ち上がった団体が、さて、一職安管内で立ち上がった団体が、さて、一職安管内で立ち上がった団体が、さて、一職安管内で立ちといる。

協議会』の体制ができあがりました」 「その後、経済状態は好転しましたが、当 時最も難題とされた就職の際の『指定校 廃止問題』について組織を発展させなが ら取り組んでいくことになります。八王 子、三鷹、町田、青梅管内の協議会が発足 し、府中管内の参加をもって6ブロックに よる『多摩地区高等学校 進路指導連絡 よる『多摩地区高等学校 進路指導連絡

に集い、午前中は職安の会議室などで地各校の就職担当者などが毎週金曜日

区ごとの会合を、午後はブロック全体で研究会、見学会などを行うスタイルができあがってきた。就職について協議する会としてスタートしたため進学校の参加は少ないが、毎回、立川地区だけで数十人、全体会となると多い時は3桁近くが集まる活気ある会となった。

専修学校制度の発足

を覚えています」(山野)

見学会を実施することが増えてきた。校をテーマにした研究会や講演会、学校制度が始まると、多摩高進でも、専門学制度が始まるとののである。

門学校に関する研究を深めていた。も、若い時分、そうした会に参加しては専在、多摩高進の顧問を務める山野晴雄在、多摩高進の顧問を務める山野晴雄

そんなおり、多摩地区の専修学校が加 という を専協)から、多摩高進のもとに、「高校の を生方と話をする場をもちたい」という という

ましたが、多くは多摩を素通りして都心「専門学校へ進学する生徒が急増してい

関いたらどうか』という提案をしたことが集まる 『相互理解をはかるため、地元の高校の理解を得めるがは少 はありませんでしたが、専門学校の研究はありませんでしたが、専門学校の研究はありませんでしたが、専門学校の研究が集まる 『相互理解をはかるために合同研修会をしたいという要望でした。当時私は、役員でを対策すると

山野がそう提案したのには理由がある。 「高校の進路指導現場は、大学進学と就 精導をきちんと行える教員はあまりいま せんでした。そういう私も、進路指導部内 で専門学校の担当になったにもかかわら ず、最初のうちは、自分の足でろくに学校 が最初のうちは、自分の足でろくに学校 を調べることもせず、情報誌を頼りに、生 を調べることもせず、情報はであく、規模

「数年後、立川地区の研修会で発表する の追跡調査を行いました。すると、ある特 の追跡調査を行いました。すると、ある特 定の専門学校に進学した卒業生の半数 比上が退学していたことが判明しまし た。ほかにも、事前の説明と実際とがかな り異なる学校が少なくないこともわか り、愕然としました」(山野)



上.齊藤勉先生(南多摩高校) 神林真理子先生と森健介先生(白梅学園高校)

内の大学にも広がっていった。

95年には、「多摩東部12大学広報連絡

悩んでいた大学進学率が、再び上昇に転

専修学校制度の発足をきつかけに伸び

大学との連携が始まる

じた92年ごろ、多摩高進の連携先は、地域

の追跡調査をもとに「ドロップアウトの実 翌8年には多摩高進と多摩専協の合同 態」というタイトルで現状を報告した。 研修会が開催された。山野は、勤務校で 責任を感じていた山野の提案もあり、

専門学校との連携

び、成長していこうという会でした」 年度)事務局長を務めた森健介(現 白梅 学園高校)は、研修会についてこう語る。 高進の活動にかかわり、第10代(95~00 今に至るまで続いている。84年から多摩 「地元に良い学校があるのだから、共に学 実は森も、何年か遅れで山野と同じよ 多摩高進と多摩専協の合同研究会は、

うな体験をしていた。 「初めて担任をもったころ、よく調べもせ

> か、就職後の離職率も高いのです。その事 ず、長年の慣習からある学校を勧めるこ りしている。など、そこまで伝えられる力 り出してはいけないように、専門学校につ 教員は専門学校についての知識が不足し を恥じました。今もそうですが、高校の 実を知ったとき、責任を感じ、自分の無知 をもたねばいけません」 め、『この学校は、評判は良いけれどあなた すのが私たちの仕事です。足で情報を集 いても、きちんと理解したうえで送り出 ています。偏差値だけを基準に大学へ送 無認可の学校で、学歴にならないばかり とがありました。ところが、調べてみると に合わない』とか『地味な校風だがしつか

れた。また、学校見学会では、在校生との どう変わったかという追跡調査に力を入 森は、送り出した生徒が、教育を経て

> 懇談の場を設けるよう努めた。そこで拾っ 路指導現場で生かされたばかりか、フィー ながった。 ドバックすることで専門学校の成長にもつ た生の声や、客観的な評価は、各高校の進

ている鈴木隆は言う 98年より多摩専協の代表幹事を務め

る』とおっしゃいました。以来、多摩高進の す。私が若手のころ、『なぜ、多摩の高校生 がありました。それに対して玉橋先生は は地元の専門学校に進学してくれないの が、逆に良い評価も浸透していくわけで もっています。悪い評判はすぐ広まります をしている』などの情報を本当にたくさん 行き渡ります。『あの学校はこんな教育 か』と、多摩高進の先生方にぶつけたこと 良い教育をしていれば生徒は必ず集ま 「多摩高進さんは、内部で情報がすごく

発に行われるようになっていった。

体間で、高大連携に向けた取り組みが活

どの高校の

開かれるように

んな生徒にも 等しく道が

高校間で、さらには多摩高進と前記の団 機感があった。そんななか、個別の大学と 期。大学全入時代を前に、大学側にも危 高大連携という言葉が使われ始めた時 いう団体が誕生し、連携を深めた。 の大学、自治体、企業などで構成される お大規模かつ定期的に続く合同研究会 との協力関係が始まり、翌年からは、今な が実施された。02年には、多摩地区の多数 会」(現 東京多摩私立大学広報連絡会) (学術・文化・産業)ネットワーク多摩」と 文科省が外部との連携を盛んに促し、

山野の尽力により、各団体の協力のもと ベント「夏休み授業体験」が始められた。 を活用し、一斉に模擬授業を体験できるイ 大学や専門学校のオープンキャンパスなど 02年の夏からは、多摩地区の高校生が、 進学者の増加につながりました」

ベルアップを図った結果、地元高校からの 先生方に意見をうかがいながら教育のレ

で実現した大掛かりな行事だ。

できるというプログラムだ。特定の大学と った。当時、事務局次長としてプログラム 全域の高校生を対象とする点に特徴があ 高校という1対1の連携ではなく、多摩 が無料で、通年または半期にわたり受講 多摩加盟大学が開講する授業を、高校生 を推進した山野は言う。 ム」がスタートした。これは、ネットワーク 03年には、「チャレンジキャンパスプログラ

みに意味を見出していたのです。 があり、道が開けている。そういう取り組 することは、普通に行われていますが、私 地域内のどの高校の生徒にも等しく機会 たちは地域という点を大事にしました。

学、企業との関係を深めていったことで 多摩高進の活動を通じて専門学校や大 ていたころ、『啓発的指導』や『社会理解 グラムを進路指導の6領域の一つ「啓発的 た。高校生が大学の講義を受講するとい という文言に改めて触れたことで、また 校内で指導することに行き詰まりを感じ 04年度)事務局長の任にあった生駒俊樹 援・進路保障に努め、当時、第11代(01) な経験」という観点からとらえていた。 『連携教育』に可能性を見出していまし (現 京都造形芸術大学教授)は、このプロ 「生徒の興味や関心の多様化に対して、 定時制を中心に、長く生徒の就職支

> るようになったのです った進路意識を醸成できるのでは、と考え う啓発的な体験を通じて、リアリティを伴

> > つなげたい」という思いがあった。

防止につながることなどが確認できたと させていた生駒は手ごたえを感じた。 いう。自校の生徒を多くプログラムに参加 の向上や、進路選択におけるミスマッチの 事実、受講生への調査からは、進学意識

チャレンジプログラム

「今でこそ、進学校が特定の大学と連携

卒業生の約3割が専門学校に進学してい 摩専協に伝える。当時、多摩地域の高校 でも同様の取り組みを行いたい旨を、多 たからだ。 04年、多摩高進事務局は専門学校

門学校との連携によって、職業観の醸成に

特に生駒には、「就職と直接つながる専

は高校生用のカリキュラムを新たに準備 り規制されている。そのため実施に際して そも学外者の実習の参加は監督官庁よ する必要があり、それに伴う費用負担が なり、実習主体の授業は受け入れが困 大きい」という理由であった。 待に反したものだった。「大学の講義と異 しかし、多摩専協側の最初の反応は、期 。週1回程度ではついていけないし、そも

いた生駒は、己の浅はかさを恥じた。 プログラムの実績から、事を簡単に考えて 夏休み授業体験やチャレンジキャンパス

校に高校生を呼び込むための企画ではな く、進学後、さらには卒業後に生じるミス 慮の上、実施を表明する。 高校側の要望は、『体験入学のような自 しかし、多摩専協代表幹事の鈴木は熟

> は、自校への募集云々というレベルではな 対する向き不向きを感じてもらうこと 識を見出せず戸惑っている学生はいます。 という高校生に授業を開放してほしい』と 貢献になると考えました」(鈴木) く、若者の自立という大きな意味で、社会 いうものでした。確かに、入学後、目的意 マッチをなくすため、この仕事を試したい、 人学前に専門学校の授業に触れ、職業に

ンジプログラム」はスタートした。 に協定書が交わされ、高専連携の「チャレ こうして、多摩高進と多摩専協との間

当初反響を呼び、9年度には、チャレンジ を含め、地域内のすべての高校生を対象 プログラムが文科省の委託事業となった。 とした高大・高専連携という取り組みは だが、運営側の思いに反して参加者は 養護学校(現 特別支援学校)や定時制

高校生のため

摩高進の灯を

消してはならない





上.生駒俊樹先生(京都造形芸術大学)

下.柿崎広幸先生(都立農業高校)



常的に話し

ことの大切さ

は言う。

多くない。最大の理由は、部活動との兼ね

専門学校に参加者が偏るなど、課題を抱 ジプログラムについては、美容系など一部の 休止状態に。いっぽう高専連携のチャレン ンジキャンパスプログラムについては数年で えながらも、今なお多摩高進の事業の一つ や制度上の課題もあり、高大連携のチャレ 極的で時間がとりづらい。そうした背景 合いだ。意識の高い生徒は部活動にも積

日々の地道な活動

として続いている。

活動があってこそのもの。第12代事務局長 積極的に外部に発信する機会となった。 ただ、これらは多摩高進の長年にわたる 2つのプログラムは、多摩高進の活動を

の齊藤は言う

交換し、交流を続けるという地道な活動 学校の担当者らと日常的に話し、情報を ど、多摩高進の本質は、企業や大学、専門 う点で、新たな展開ではありました。けれ にあると思います 込みながら活動の範囲を広げていったとい ものを、地域と連携を深め、生徒を巻き 「それまで、いわば私的な勉強会であった

西村和美(現 上水高校)は言う その齊藤を師と仰ぐ、現事務局次長の

ているかといった生の情報がやりとりでき 送り出した生徒が、そこでどう育てられ 関係を築けていることはとてもいいこと。 るわけですから。多摩高進の魅力を先生 その点、採用担当者や入試担当者と近い えてきたのが多摩高進だと思っています。 い環境を作るか、ということを一貫して考 「生徒をどう守るか、生徒のためにどうい

> 制研修にはない点だと思います」 題をキャッチして、極端な話、翌週にはす う答えが多く挙がってきました。旬の話 をタイムリーに得られ、共有できる』とい ぐに議題にできる。そういう柔軟性も官 方に尋ねると、『多摩の現状に即した情報

徒を守ろうとする姿勢は、一貫していた。 かない問題に対し、一枚岩で臨むことで生 解決」など、一高校で対応していては埒があ 平等の是正」「就職先で生じたトラブルの 護学校や定時制・通信制高校に対する不 定されがちな指定校推薦枠の拡大」「養 あったように、その後も、「特定の高校に限 三多摩格差の是正など、発足時がそうで たこともある。自由に物が言える立場と いうのも、ひも付きではない組織の強みだ。 る申し入れを専門学校の団体などに行っ かつては、推薦入試の早期化に反対す

交流を続ける

存亡の危機と新たな展開

くるのだと思います」

ます。そんな場だからこそ、人が集まって う?』というアドバイスがすぐに返ってき いる』なんて話をすれば、『こうすればど 飛び交っています。『こういう指導で困って 情報もあるよ』といった前向きな会話が には、『いいね、その企画。やろうよ』『こんな は、できることもできません。しかしここ 面倒くさがる人がいます。そんな場所で

えたのだ。 地区協議会をおく形へと上下を入れ替 の連合体であったものを、事務局のもとに 変更している。それまで6つの地区協議会 区高等学校進路指導連絡協議会」から 多摩地区高等学校 進路指導協議会」へ 04年、多摩高進は正式名称を「多摩地

動資金にあてるなど、運営上の改革を行っ た。都から各校におりていた加盟費の打 年開催し、その際の資料代や寄付金を活 加えて、総会および研究協議大会を毎

Career Guidance 2012.2 No.40

の活動に継続して参加しうる中核教員が 少してきたことも悩みの種だ。多摩高進 が厳格化したことで、研修の参加者が減 を、事務局の努力により乗り切った形だ。 減っていることや、地区による温度差も課 校内での業務が増えたうえ、出張規定

流れがあるなか、就職や専門学校進学も 理職との対立にもつながりかねない。 大切な選択肢の一つと捉える考え方は、管 に、大学進学実績を競うことを是とする 多摩高進をよく思わない声もある。特 第9代(3~94年度)および第13代(07

幸は、そうした現状を憂慮する。 ~10年度) 事務局長で、現顧問の柿崎広 「出張規定の強化など、制度が厳しくな

ら進路と関係ない、などということはまつ も、多摩高進の活動に顔を出していまし 進路からはずれ、学年主任をしている間 修に参加してもらいたいくらい。私自身、 でしょうが、まじめに研鑽を積んでいる多 るのは、逸脱する一握りの人間がいるから から教員がバタバタしていては遅いのです」 ととても間に合いません。3年次になって 徒にさまざまなことを伝え、考えさせない たくないということ。1年次のうちから生 た。そのときに感じたのは、学年担当だか は、進路担当以外の教員にも積極的に研 くの教員にとっては大変迷惑です。本当

そして、こうも付け加える。

ち切りによって生じた組織存亡の危機

い方でも、活動にかかわった途端、高く評価 い学校にこちらから積極的に接触するこ は完全な誤解です。生徒を行かせたくな り込まれていないか』という意見にいたって 見られる部分がありましたが、今はそん 摘。進路つて昔は役得というか、色眼鏡で や業者との距離が近いのでは』という指 とはありません。多摩高進をよく知らな な時代ではありません。『専門学校に取 ることは承知しています。例えば、『企業 してくださるケースは本当に多いのです」 「多摩高進に対してさまざまな意見があ

導部に、そして多摩高進に戻ってきた。 を生かしたい」と管理職に訴え、進路指 自校で教務を担当していたが、「進路で力 は本間恒男(現福生高校)だ。ここ5年、 今年度、第14代事務局長に就任したの

で決断をするところまでもっていきたい。 り方・生き方を考えさせ、最終的に自分 それが目指すところです んです。進路指導でも、教科指導でも、あ

ければと強く感じている。だからこそ現 関係者同様、このネットワークを維持しな 情報が集まる場所はない。本間は、多くの 生徒の進路のために、これほど有益な

灯をともし続けたいと思 多摩の高校生のために、

教科を引き合いにこう説明する。 「倫理ってまさに、あり方・生き方教育な 本間は、進路指導に対する思いを、担当

状を良しとはしていない

るはずだと思っています。 ても参加しやすい場にな 校、企業にとっても、また私たち自身にとっ 地域におけるキャリア教育の発信の場に 部人材の活用が叫ばれる今、多摩高進を でしょうが、今後はより時代に合わせてい な雰囲気がありました。それも大切なの していきたい。それにより、大学や専門学 く必要もあると思っています。例えば、外 「昔から多摩高進には在野の団体のよう

事務局次長の西村も

熱く語る。

実な課題についても正面 ともあります。大学と高 マに意見をぶつけ合うこ 題がテーマとなりまし 立大学広報連絡会との 校の関係者がこうした切 活動のあり方などをテー くなか、学力低下や就職 た。大学が大衆化してい 合同研究会では、中退問 「昨年度の東京多摩私

> になると信じています」(敬称略) の未来についてひざ詰めで真剣に考えあ を継続していくことが、子どもたちのため 50年の成果だと思いますし、今後もこれ た関係が構築できたことこそ多摩高進 らいいなという声も出ているほど。こうし として、大学と専門学校の連携ができた 専連携だけではなく、多摩高進を中継ぎ う場ができているのです。今後は、高大・高

